

654

天智天皇

近松門左衛門作



神のまはすかどくといへり、いこそ和田のろこづゝとつたへ  
 し秋津御代君たるるな齋明天わうめぐみもひろきさなみやし  
 がの都にくはうさよあり神國のまつりごととこたらせ玉はぬ中にもわ  
 さて當國江州の一神しらひげ大明神と侈ろさやう淺らすたらば  
 の右大臣とみふさ公と勅使として百味の侈くうとけんせらる勅使  
 ちたは玉へばしやそは經のひもとさきとめしんしよく  
 みやづこたち山のいのたのもり七五三五々三大みさくた物てんぐそ  
 ればがく人しちくとろうしけり、時にふしぎや侈とらののげよりおさ  
 るそがたの神さびて、侈くらの飯とぞふくしける人やはつとおどるさ

天智天皇

明神みくらじんのんふまし〜ておがまれさせたまひぬと一どおらい拜まがつ  
 がうと右大臣みぎのちじん富房とみむらあざわらはせ玉たまひ、それ神はまひと以て正體しょうたいとし、敬けい  
 と以て食とす此有様は心へず、食に渴かつし神ならば人を守まもる力はあらし  
 いるさま天狗てんぐの所為しよゐならんれ引出せとの玉へ、執權しやくけん金輪かねわの五郎今  
 國小がひな取て見てあれば六十余りのやせおのこ腰ぬけたるにぞ有  
 ける、このれ何者ぞまつそぐにやせ少しもちんせばくせとぞとこゑとあ  
 らげ云ければ詞此翁このおきなふるひ〜さんい某は狩野の氏久とや繪師にて  
 い、此度みのおより五畿内の美女びよと繪ゑにのきて參らせよ、形かたちとゑらみ第  
 二の宮のづらさの大君の、後のち立られんとのせんじ下りしに、弟あに兄あにさ  
 かの王子某と召れ、右大臣富房公の娘花てる姫は三國一の美人なれ  
 共、子こい有間悪女あまのむすめにのきて參らせよ、ぬぎに及ば、がいせんと有し故  
 せひなく繪ゑにのきいへ共重て人ひとにのたらんと、足のそぢと切て此島

に捨られい理非りひとばいのにしらひげの神も佛もなき世のどゐたりも  
 あへずなきるたり、大臣よこ手と打玉うひ花はなてる姫ひめとい某それが娘あり、さ  
 めの王子執心しやくしんあれ共はういつのあくたう故弟あにのづらさの大君の、後  
 後に奉らんとねがひしと、そねみてへんしうと覺おぼえたりおろのなり〜、  
 せんさくそるは安けれ共しおらばこととこのむに似たり、先とんびん  
 後日のせうこに其男そのおとこひそるに宿所へぐしおへれ、扱あつか神事かみじとるな  
 はれり六こんしやうじやうたゝりなさるゑ、神ならば神とへいはくと  
 つてはらひ玉へばくはんげんの、調子てうしめてたさびはのうみ、夜遊よあその、ふ  
 がくそ有がたき悉くも齋明さいめい天皇てんかうと申奉るは舒明帝しゆめいていの、後のち女性おんなじやうせいながら  
 も十善じゆぜんの位ゐとつぎ、ことし六十のゆぐしの雪ゆきさぬせぬうちに、位ゐと、も  
 づらんとはかばすれ共、一の宮さゐめの王子おとこの人相おとこ野人やじん、心こころひすらし  
 に國王こくおうの器量きりやうましまさねば、二の宮葛城かつらぎの大君おほきみにとうぐうのせんじ有

きないの美女と繪にうつせきさきさきだめの花くらべ、こうれうでんに  
出御ありゑいらん有ころやさしけれ、

美人ぞろち

先一ばんはとよはらのもゝねが娘二の君りさんの春のにほひ水は  
だえのつやのあたゝるに、よいのはつと引しめて、ねてもらひたさか  
もろげや、目もとゐだるきまゆぐもり、わらふがことく見へにけり、つぎ  
にのけしはよしみねのちふるがいもと、はるのせといふとんないの成  
るのぐ何筆にうつせばうつそ、のほはせはいまさき出し、はつさくらに  
ゐおはくるのうば玉も、人の心とやみになせとやまよへとや、しづめ  
とや、たれる氣まゝにのきなせし筆のそさみもねたましと、しばらくな  
がめ玉ひけり、扱又つぎは中なごん、せさかおがむすめあらしのきみ、あふ  
みのひやうゑが卵のはなやまぶさはらゝらの美女さのやそむねがと

どの姫、八重といへるはいとけなきふりわけがみのみだれても、こゝろ  
ちらさで、ひとそぢに、いづこのとのゝしたひもとむすぶの、神の神心、あ  
ねて聞たしといまほし、第七ばんにのけたるは、たはるの長者がやうし  
しさぶの前あめと、おびたるとこなつの、風にめさますわらひがほ、みど  
りのよきびんせんげんとして、八七のほそまゆゑんせんたり、げに三千  
の戀ぐさも、いろあらしあふためしにてたうのぐしきみわうせうくん  
きひりふじんとうつす共、このうへはよもあらしとつやぐ、見とれた  
まひければ君とはじめたてまつり、しこうのによくはんのんだちめま  
つせのびじんこれなりとのゝめさきゝめきたまひけり、はるのの末に  
のけたるは、たちはなの右大臣とみふさ公の息女、花てる姫と名にこ  
そたてれ、色くろくせいたるく、たれゝあぐべきつくもがみ、花のあたり  
のみやま木とよのゝとつとぞわらゐるゝ、天皇大さにかゑるゝせた

まひ誠や此姫は三國ぶさうの美人のづらきの大君のささきに立んと  
 望し故ちんがいとしき思ひ子の一こながむる花なれば人づてにては  
 ねぼつゝなく此姫ひとり見んためにけふの會とばもよほせしに見る  
 もいふせくあさまし、人はいつわり頼まれずとげきりんしきりみ見  
 へ玉ふらねてたくみしさめめ王子おもふつばあたりしとしやく  
 取なとしやさるゝは<sup>詞</sup>ありそめの義にゆはず抑和らんだ臣の位たる身  
 は君といさめ國家のゝみたるもつて槐樹<sup>つばき</sup>當職のさぶと仕るなん  
 ぞや右大臣とのれが娘ときささきお立んとてゝゝる悪女と美人といひ  
 なし天<sup>てん</sup>聞<sup>ぶん</sup>とゝすむる條たさいよんどころいはずはやく右大臣のくは  
 んしよくとけづりへいもんせしめ此のけゑと都の大路にさらし萬人  
 の見せしめにそなへられ然るべしとぞ奏せらるは母みゝどはげきり  
 んの上理非に及ばずそれくけびいしに仰せてきつとばはらへらた

くと、は氣色のはつて龍顔にもみちとちらすゝら錦玉だれふゝく入  
 玉ふ勅に任せて坊門の車大路に竹がきゆひ姫のゑづとぞさらしける、  
 往來の老若男女芻蕘のもの雉兔の者柴うるしづも立とまり<sup>詞</sup>面體と  
 なりゝる悪女も有物のうらゝは山家者なれど此上郎にくらぶれば  
 我は天人ばさつがは身とばそてまい物なりと、もびさしわらひ通りし  
 はけうのあきんと聞へけるわらいたわしや花てる姫此由とつたへき  
 口おししゝなしやとほてんと忍びはしりつきのけゑと見れば我そ  
 がたにくやきたなやこはいゝにどふため共見やられずしばし、あされ  
 ておはせしがやゝ有てこゑと上ゑそらとゝはいひながらいゝ成あ  
 だにかほと迄悪女にはあきたるぞ定めて是は大君の器量めでたく  
 まします故いづくの女の心とあけわらわとるねみしわざならぬいゝ  
 に我戀とゝなへんとて、女のあひみたがひぞややわたれしもよい男は

もちたい物此うらみいゝせんとのきくどきてぞなき玉ふめのとこの  
 金輪の五郎跡よりあけつゝ、いしたなし姫君様我君大臣公たゞ今白  
 ひげより下向有、此糸の筆者とぐせられひせうこと以てせんさくし  
 渉ちまよくとそゝがんに先か歸りとやせ共いや洛中にはちとさらし  
 此うへはいさがひなし此まゝにとものくもとなと泣さけびてればし  
 まそのゝる所にあづらさの大君の幸なりとさきとばらひあじろの  
 駕とめぐらしみそたのゝとゝげさせさんざめりて見へける  
 が此糸とちらとほらん有あないふせ見ぐるしと袂とほはにればひ玉  
 へば、此供の官人等ゝる不淨の物ほめにゝくるみそれほこし急ぎま  
 せいと足ばやに通ひけり、姫君のけ出ほこしにすがり付なふ大君様み  
 づらは花てる姫あまりにむとさき渉しゝたは情こそたあらめ、數万  
 人のめあけて恥とさらさせ玉ふと、うらみの上の滲恨思ふ殿渉にそ

はぬあらは三十二相もいらね共、父母のめぐみにてあの糸の様にはう  
 まぬ者よし假みづゝらと深山のかくのさるにもせよ、女に心のけらるゝ  
 の男たる身の手がらぞや、人にほれられさ程迄ねらの立つとゝの  
 人めもわゝすくどゝるゝ、詞づゝひの色ふゝく面體そがたのあてや  
 さ、雪とすみ糸の筆の跡にたる所ゝなりけり、大君こしよりまるびお  
 り、扱はば身は花てる姫の、誠の姿と終に見すふゝくのふるまひ力なし、  
 此上は母帝へそうもんし耻まよくと清め、今より丸が枝折の名木の花  
 てる姫と、手と取玉へば引はなし、ひんとゝほふる目づゝひや、涙に少し  
 おもばれし地がほはいとゝうつくしや、然る所へしころづきんにゝは  
 ろくしたるあら男、數十人ばらゝとゝけあつまり、あたりとつきのけ  
 姫君とひつ立んとそる所へ、今國とんで出何者あればらうせきと、そり  
 打ていひければ、それうちとれとよばゝつて、大せい一せにせつとよ

りそはとこそと供人も大君にひつそふてらうせきは何者とこそゑく  
 にこそわめきけれもはやのくそに及すとどのくづきんと取けれ  
 ばさあめの王子と大將にてあはぢのつぐなはたけちのあはらせなん  
 ぞいふ一みの悪たう五十余人はやしの如くつゝ立たり詞王子大とん  
 上いゝに大君我れなんぢが兄ながら母みゝせにうとまれて、いゝと  
 受ざる無念の上花てる姫にはそれがし心とあけつるに是もあんぢに  
 うばゝれそくはいむあしくもださんやとつく姫とわたせさなくば傍  
 へんはいふにもたらず母みゝせともうしあひ大日本の王法とめつし  
 めいあん國となそべし國のため民のため身と捨るは天子のとく道と  
 思ひ孝と思はゞとくく姫と渡そべしと兩がんくはつと見ひらさし  
 はたゞみやうじやうのごとくなり大君涙とはらくとあがしあさま  
 しの傍有さまや此女はしうしんといはゞともあくもにいへ共いもせ

の道はたがひに思ひ思はるゝこそ情共やべけれけんを以て召れん  
 は下郎のしわざ戀も色もあらばこそとに此とあなはずば母みゝせと  
 もがいし國とみださんなんぞは天罰はあばさぬの其心故にこそ  
 兄ながら傍そくのゆさたともやめられし末世のそしりはあばさず  
 やと理とつくしてさやうくん有詞いやさ仁義五常は聞たくなし二つ一  
 つの返事せよいゝにくゝと有ければ今國つゝと出是さ王子殿傍へん  
 此度のたくみは繪師氏久が白狀にてことくく知たれ共主君富房公  
 道とおもんじとんみつなるに有がたしと思ひ歸られよ此今國めおは  
 わるいむし有てとんあとはあんにんせぬびやくらい王子とはいはせ  
 ぬとひぢとはつてぞやける、扱は必定姫と渡すまいなとんでもあ  
 とならぬくゝいやでつちめが慮外なり討てとれ承るとぬきつれてあ  
 りけるそいさんなりと今國ぐぶの人と左右にたて入ちがへてぞた

ゝるひけるみゝたは長袖今國一騎火水になつてたゝるへ共敵は大せ  
 いあら者なりせんゝたなくて今國は大君姫君ひとつ、こしにいだき入  
 下人にゝせ、いそぎかへれといひすて、王子とめがけて追ひける  
 其隙にゝはるせつぐなはるけ來り、こしゝ共ゆん手めてへ切たとし  
 兩人のこしとらバひ取二三町にげ行と今國きつと見なむ三寶と、一も  
 んじにはせ來り川のせがたゝるもゝと、きつておとせばつぐなり、こし  
 ととて、ぞ逃たりける、頓てこしよりおるし參らせ討れし下人のいし  
 やうとはぎもつたいなくはゝへ共是と召れてうちでのほまへ落させ  
 玉へ、某のちりやくと以て王子とほるぼし跡より追付やさんと笠打の  
 づけ姫君大君おとし參らせ、其身はこしに入ゝはり討もらされたる下  
 人等に、しゝゝといひふくむれば心へたりとゝいいて行王子つぐなは  
 是と見てゝれあますなととつとよる、いひあはせたる下人共、少しさゝ

ゆるふせいにて、こしとすて、逃行と四方八面にむらゝばつととつ  
 ちらし、はしりゝへつてやれながとひそなく、姫大君はこしに有此二  
 人と取らへは、本望ゝ此上は大内おみだれ入、母天わうとらばひとり  
 天下國家と手にとれば、天地日月神佛草木國土鳥けだ物がらがるる  
 くづふく風も我が心のまゝなりと、ととりあがりとおひあがり天もひ  
 け地もひけとらとら、くゝととふんだる足、いさはひははくた  
 わういだ天四天はんぞく王、たいばだつたのいさはひゝとみなかそれ  
 と、なしてしたがへり

第二

さゝめの子はうばひ取たる乗物と、今國とは夢にもしらす七重八重  
 あゝらげゆたに歸り、おくのいでいゝき入させ下人とはらひ、其身も  
 そくたい冠あらためこしにむゝつて是々大君花てる姫はけふよりそ

れがしが妻成ぞ思ふ中と引わけられさぞ口おしくはるなうらめ去な  
 がらいふてもないてもあるぬと兄弟のよしみに命はたすけて  
 さそべし詞姫もよふきおれよ今迄手ひどくあたりしもろちと我手に入  
 んため戀にはきのせくならひおほのきめこそあらく共女とわいのが  
 るとの大君にまけはせじ二世迄とけよ打とけよとくまをそしどおら  
 みのなは切はせき戸とあくれば今國中よりとんで出りさし立おぞた  
 つたりける王子もあされて逃逃もやらす誰の有とよばればつぐない  
 とはじめせい侍共とつ取だちにてはせよりしが今國きつとねめ付れ  
 ば左左右右なくもよりつゝ跡しさりじつと引とつとよればにらみつ  
 けにらまれてはじつと引よせつ引つ四五度が程犬のいどむがごとく  
 あり王子まゐこくはつとひらきつがねのとくなるこはねと上て  
 やあ詞く金輪人げんはいふに及ばず天地の間にあらゆるもの此王子

にむのつてたちに手とわけ氣色せんもの鬼神にても覺えずたどへば  
 のらめ取共逃逃まよふべきにわつはがこのんで是へ來りしはばつくん  
 のしれ者ふてきとやいのんすいさんとやいのん姫大君はいづくへか  
 とせしまつそぐにゆせちんするにといてはけころしてくれんすなん  
 とくどおめさける詞今國ちつ共おくせず聞へぬ王子の一ごんのな乗  
 物にて承れば某と妻おせん二世迄と有けるが早くもかゝるあすのが  
 は八まんそれは無心中王子の仰はりんげんにひとし我ために王子は  
 殿御殿御それがしはれくさまぞちつとぬれおけやであんそであんそとた  
 ちぬきくつろげつとよりくよるまいく人のきげんもしらいで  
 すいきやうのさちがひやしされくといひながらはしらこだてに身  
 とよせて用心してぞいありける詞今國あらくと笑ひ扱無心中な殿御  
 のあ但心と引見ん爲る心中がほ所望ならばうでゝももゝもつさや



さふら、世間にはやるゆび切のいやく、それも初心なり、どらく此世は  
 りりのやどながきみらいのちぎりのしるし、王子と我とさしちがへ必  
 中してゑざうしに乘るささしとたゝみとたゝきひざたゝきはら筋よ  
 つてぞ笑ひける、王子もほとんぞけうとさまし、扱を聞しにまさるふて  
 き者のな詞とよそよるとひるといひ天と地といひなしても、某が詞との  
 へそ者天下にはなありしに、さそが名にあふのなわにて、有けるよもし  
 も某うんつきてゐめいはるふる時節せう来らば、此王子がくびと取べき者  
 なんぢならで覺えず、日本ぶさうのもうし頼もしく詞、去ながら天う  
 んの往來わらいはたちれたなの力おも及ばず、なんぢいきはひはまさつたれ  
 共うんは某にまけたれば、王子と討んぞ、の思ひもよらず、向後けうごそれ  
 がしにしたがひ奉公せば、ばくたいの所領しよらうとあたへ、主従しゆじゆ水魚すゐぎよのちあみ  
 となし、天下國家てんかこくととさむべし、若いはいに及ば、只今王子が手にあ

べし、但は姫がありのやのみつに一つのへんたうは返たうはとい  
 るこゑほらとふきしとどくなり、今國ひざ立なとしのうべとさげ詞  
 氏うぢとじやう程はづのしき物あらじ、悪人とはいひながら、さそが長袖ながそでに  
 てればするな、三國無双さんこくむじゆうの無理いひわやく人と聞けるが、此詞のなわめが  
 いきはひに恐れ、とてもあふまじとゆらんじ奉公せよ、召つのはんあ  
 ぞ、げたと預け玉ひし、然れば、はんらい本性はあくぎやくもなけ  
 れ共、ついでせうひやうりのねい臣共、ゆ光く、のけいはくとばに、るだ  
 てられ、我しらすのまを將軍は、あけん者なき故、せひもあし詞  
 いありあがら、あなわめがたとへと取て、すべし物じて、人の病と、すは  
 身とくるしむる敵あれ共、敵ありとて病にあらく、あたる時は、病つもつ  
 て身とほろば、あるが故、あにくき病はな、なだめて養生を、まつ其と  
 く王子のあせい、つよきによつて、人したがふには、ひのす、人はあしこく

のいて通すと、おろるゝと思召す、所存こそは、おろるゝあれ、くんしは日  
 お三たび我身と、へりみるといへり、當座のけんぬに、まらせ手前しら  
 ずのめつたまど、日月の眼あきらのなれば、善は善惡は惡、天道にゑこは  
 なし、<sup>詞</sup>まゆんとやせしけん、王は父のたくなに母ひすかしに、象おこれ  
 りとて親兄弟におくまれながら、ついに天徳あらはれ、四百余州のある  
 じとはなり玉ふ、たいはくは三たびくらぬと、まし玉ふ、たゝねがのくの  
 惡念とひるがへし、大君とほくらぬにつけ玉は、孝といひ禮といひ、王  
 子も天のめぐみと、うけ侍末めでたふいべし、又此まゝ、ばらわくにふけ  
 り神明ぶつだのみやうのんにそむき、八く八なんのせめと、うけ玉ふ時、  
 ろなわがいさめ、なつゝのしく身と、おんでくやみ玉ふ共、こうくはいさき  
 に立べ、おらず、是程造やさん者、日本には覺えず、は父みるせのよみがへ  
 らせ玉ひても、此上の侍るけんは、よもあらじ、あさましの所存やと、あ

るひはねせしあるひはなだめ涙と、ながしいさめける、王子大きに氣色  
 と、そんじ<sup>詞</sup>、につくき汝が諫言存外、千万せひ、兩人があり、おとやせさあ  
 くの其座と立せぬと、たちに手と、おけつゝとよるゝなわもひさと、おし  
 たて刀のつばも、とくつろげぬ、おばうたんず、うたばきらんず、氣色にて、  
 たがひにまなこと、さうにくばりいきと、つめたる有さまは、にはとりつ  
 がいりやうこのせい鬼と、まゆらどのごどくなり、末座にひらへしつぐ  
 ない見ゆるし、<sup>詞</sup>、虚外者と、びるゝつてうしろよりおがみうちにはた  
 どうつ、ひつはづしてゑりがみとりくるゝと、引まはし、とつてひつし  
 きのりゝりしやむしめらが、そいさん千万、惡人のそへて共、おなわが  
 手あみあ、んばい見よと、<sup>詞</sup>、びねぢきつて立所と、王子するさずしつゝと  
 だくだ、おれてゝなわもつゝおみつ、き兩方大力とし合しが、おなわがみぎ  
 のき、足といたじきにふみぬいて立ん、くどそる所と、大せいおありあ

ひ手とり足とり八方へこそ引はりけれ王子悦びてでりしたくこゝ  
 ちよしとたちふりあけて雨のふひなとゑいゝときりおとそはむね  
 んしごとくといひつべしさあ此うへは氣遣なしあはづがはらにてくび  
 とはね、ごくもんにはさらそべし日本一のこのものど、あらめどつたる此  
 上は天下もわらるも我物なり、酒のゐんせよ殿ばらと悦び、おくにぞ入  
 にける、今國大をゑ上、口おし、方こそ高下有、老んぎに及ぶ力あらじ  
 と道だてして、ふらくと取し、神にも天にもいのはり有日月ままとてら  
 すとい、見とてらされたりてらしたりよし、是も運のせうれの  
 詞  
 とのれ王子めたとへすんぐに成たり共、我身のにくに一寸つゞきし  
 所あらば、こんはく、そこにとゞまつて、みとせとはた、せまじ、よつく覺  
 ぬよ思ひしれと、につと笑ふてひられ行しよぞんの程こそあはれあれ  
 げにやこゝにも繪のとはしるきと後と夕なみのあはづのさとのゐた

はどりに、松岡の權太郎氏長と云ふ繪のさあり、是はさんぬる比美人ぞ  
 ろへの繪合せあさゝめめの王子にころされしもの、氏久がむこにて、し  
 うとにととらぬ畫こうなれ共、三年此のゐた兩がんしゐ世にあひがた  
 き石硯筆とそてたる身なれ共我ために氏久は師匠なりしうとあり、彼  
 是のがれぬ敵なればさゝめめの王子とうたせてたべと、こすいとむすび  
 こりととり、天といのつて立待し必とくだくぞふびんなるこよひもぎ  
 やうほう、どこあひていへちとさして歸りしが、あはづが原のこゝげよ  
 りいどものすごきこはいろにて、松岡ノとよぶこゑそ、夜陰に及び  
 野中より誰らは我とよぶこどり、こたまにて有けるよとそろりくと  
 立ゐへれば、又松岡ノしばらくとぞよばりけるいよく、ふしんは  
 れね共、こゑにしたがひつゑにまのせてたどりつき大音上げ、此くううと  
 たる野原より松岡とよばん者は覺えず、もうもくとゐとはりし笑はん

ためら、何者なるぞといひければ、尤、我は花てる姫のめのとをな  
 わ五郎今國と云者あり、此たびさあめの王子はあらひにて、ふしやう  
 の死ととげ、ごくもんにはけられし其無念このすいおてつし、こんはく  
 ろうべに、こりのたまつて、しんぬがうせい、六こんとくるしむ、やどの松  
 岡頼むべきと有て、詞とわけしぞいゝに、くどやける、松岡ぎよつとし  
 て返たうもなありしが、や、あつてあらく、と笑ひ、扱ばりしたりく、  
 やれ野狐共、兩がんこそ見へねむねの、めうきやうくもらぬぞ、ごくもん  
 の物いふと異てうはんでうためしなし、狐の人に用有とはあづきのは  
 んが所望か、稻荷のとり居のとびろこあひとあざ笑ふてぞやける、いや  
 是うまつたくやかんのわざあらず、万物道理に二ッはなし、はぶんゑの  
 さの名人なり、すみゑの龍の水とこふも一念のとゞまる所、然らばごく  
 もんのくびの物いふと、ふしぎにてふしぎならず、是にもうたがひあり

やいなや、松岡はつと理にふくしげに、是はあやまつたり、四大はくうに  
 ろへせども、しきしやう天地れい、くちせぬ物よなわ殿、承り及  
 びしと立よりくびとなでさそり、さていたはし、く、それがしがしう  
 とのためお王子はぢうく、あたきあれ共、あく盲もくのことなればい  
 ひろひあくやおぼしけん、ごせとふて奉らん、心やそく、あやうぶつあれ  
 どんせうばだいとゑのうそれは、聞とひあきとんせう不だ、それも  
 の、ふのあやうぶつとは、あたきと討てはんもうととげたる所がみだ  
 如来、さあめの王子とつ造はあふいやの成佛やと、さばとあんでおめ  
 くにごごくもんの木はこがらしに、こがくのゆるぐごごくなり、松岡の  
 さねてげにいさぎよし去あがらく、び斗にてはんもうとたつせんとは  
 いゝに、さればこゝ頼みたきとは其とよ、我はくび有てあらだなし、は  
 ぶんはもうもくくびなきも、せうぜんなり、はへんがくびときつてせう

と我にゑさせよ、なんぢがせうにそれがしがくびとつぎ王子とやすく  
 やるばしあはば、ゆへんもほんいとどくるにあらずや、松岡聞て、それこそ  
 やそき間のと、しりしそれがしがせうに、ゆ身がくびにて、ひつぢやうの  
 たきのうたるべきしるしは何とく、如是我聞心佛及衆生是三無差別  
 別なんぢも我もへだてはあらじ、げにおもしろしく、色即是空空即是  
 色、ほんら一佛のゐんえんたり、うゑたるおに、身とあたへ、諸行無常の  
 さとりとゑし、それはぶつたいこれのぼんぶ同じちのひは有明の月に  
 あ、やく劔とぬいて、是るなわ、ゆ身がためおも我ためにも、王子は敵  
 のとなれば、頼まれ頼むみぢならず、いはりに殘せし我つまのさころな  
 げのんふびんさよ、ひとへにたのむは是はあり、た、今あらだどわたそ  
 どと太刀とりなとしくびにあてゑい、く、く、ととしきれば、あへなく  
 前におつると見へしが、あなわがくびのこくもんの木より下にまひさ

がり、さりくちにとまりし、のりのおりあるごとくなり、ちうのうと念  
 力くのしきけい八みやくつうにうしくびのきりめにさづもあく生れ  
 ついたるごとくなり、あうべとなでつふつて見つゝ、うれしく、有が  
 たし、二世のほんくはいたつそべしすくみだりへあけいつて、先王子  
 とつたつべき、松岡が妻にしらせん、とやせん、のくやとゆきつ、もどり  
 つ立つのつしあんもさらにおちつあす、松岡が女ばうはむらひのため  
 に來りしが、つあ、く、とたちよりなふ松との殿、目の見へぬなりとして  
 いづくへあふといふとぞ、さあお歸りぞぞとひき、あはと見れば夫  
 にてなし、調いしやうもたちも松岡殿にまがひなしと、あたりと見れば  
 夫のくび、なむ三寶さて、ののれ、ひはぎな、やれ人ごろし出あへ、  
 とよば、れば、さと人ばうとひつさげ、一途にはらりと取まはす、調や  
 れれうぢまなく、たうぞくにてもなく、又にげはしる身にてまなし、しさ

いとさけととしづめ、それがしはかゝる五郎今國とて是此こくもん  
 おのゝりし者、まづおくの次第にて、松岡にあらだとの、りふたたびせ  
 いし、頭かしらはのなわさうは松との、一身しんに二人の氣とこめほんもうとげん  
 けいやくぞ、此上に聞入なくはいの様共はあらへさりながらへつて  
 松との、ほんいにもさるふべしいの、とすける、女房もさど人も、  
 さりとて是は心へすとまゆと、ひそめてゐたりしが、げに本望とたつせ  
 んため、さやうのともいはん、さりながらまことしゐらず、たゞし我つま  
 のあらだならば日ごろのさるし、繪といいて見せ玉へとすゞり出せば、  
 心へたりと、たてたるせいさつうらがへし、すみすりながしふでとそめ  
 さゝなみや、滋があらさきのいり日に、おつるあきおせや松のした  
 ばにとぶちどりなみの花もさしほらしや、すみ付ひつせいつまのふで  
 にうたがひなし、女房おつときえ入て、あぢきなきはうきよの中、まし

てかのこたる者は、義理お命とそつるもならひいゝなれば松岡殿、とて  
 も物と思はせばたゞ一ゝたに思はせで、おたちはいきて有るがら、御貌  
 斗はし、玉ふ、めこそあゝねこゑは聞しり玉ふらめ、今一度女房よと  
 んな共よといふてたべと、くびとうごのしいだきつきりうていしてこ  
 そ歎きけれと、いり、松岡も、くれ、とそ中されき、某も此  
 とんしやういゝのでそりやくに存すべき、先大君のゆゆくゑおぼつゝな  
 し、跡としたひ其後は、いゝ様共、身の上、望みとゝなへ参らせん、い  
 とま中といひければ、いゝ夫にはなれてよの中、に何の望みの有べきと  
 そでにじがいと見へける、と、はて是ゐるい合點、夫にはなれしとは何と  
 とぞ、此くびころは他人あれくびより下はゝんじん、追付本望たつ  
 しゝば、罷歸詞つてゝは斗いあちらむきはだへはなじみのふたりねぞや  
 とたはふれそゝせば女房も、涙のしたおにつこと笑ひ然らばわらはも

侈ともと、夕つげ鳥のあふさる山、たにみねこへていそぎゆくしやばわ  
うらい八千度、それの上代是は末世其身は佛しん此身はぼん、なゆた  
あそろぎ無量むりやうどうかくまんどうはのはれ共、ぼんねんぼんうのたまの  
とは切てもされぬぬなわがいのち詞きめうきたいのにんげんやとさく  
人、あんとどもよほせり

第三

我國のほうきけんしないし所とすは、天子のいとおなじうして宇だ  
とぎよそるしるしたり、侈いたはしや天わうは、さしもはてうあいふ  
りしうつらさの大君のゆきがたしらすしんきんとなやまし玉ふう  
へ、王子しきつてほくらゐと望み玉へば、今のせんゐたわらゐねのつち  
もくさ木もあく人の世とやなりぬべき、一たん王子が必となだめ其の  
ちわばくとむすばんとたくみのゐみに仰られ三じものたゐらのうげ

どうつさせ玉ひければ、がうりもちがはず作りたて、どさ、げ、る、天  
わうゑいゐんあつてやがて王子と召るれば、さゝめめの王子は何とぞや  
らんとなとしの下にはらまさし、大だちはいたるこつからはそさまじ  
うこそは見へにけれ、侈母天わうほらんじて、扱もにげなきふる舞ゐな、  
侈身も同し我子ぞや何しにさのみにくゐるべき、あづらさの大君ゆく  
ゑなくなる此うへは、侈身とくらゐにつけんためさんしゆのたゐらと  
わたそぞとよ、吉日ゑらみしよくゐしてめでたふ國家とおさめ玉へと、  
まとしやゐにの玉へば王子にせものとは夢にもしらす詞、扱は侈がて  
ん参りしな、此間たつてしよもういたせしゐせせうゐんゑありしゆ  
へ今日じつふとた、し母とはいはせじ、とつてながし奉らんとおもひ  
まふけてゆい、お仕合、いゐあ百くはん日本三十六代の國王はそれ  
がしぞあめがした我心にそむく者あらね共、あづらさの大君花てる姫

ろれら兩人おぼつゝなし見あひ次第にあらめ來れ但なんぢらも大君  
 にゐたうせせば、ゐたはしにけこそさんと大ゆゑきつと見わたせば、じ  
 こうのくぎやうのふりゝゝたふけ、あつと斗にへいふくそあさまし、の  
 りけるときよなり、母天王おぼるき玉ひ何大君とあらめよとや、身  
 のきたいの悪人なれ共くらゐとあたへあだめなば、心もやはらぎ大君  
 ともいととしうすべきをさてこそたゝらと也づりしに、とがもなき  
 大君とあらめとれとは何ぞぞや、わうゐあそあはるうへゝらは天下  
 のたみとも子のこくとくめぐむころ道あらめ、我弟とも討んとはわうた  
 うにろむく第一なり、母かうくとおもひなばじやけん、の心とひるが  
 へし、中よくして大君とあはれみゑさせよやれ頼むぞと、涕涙にぞむせ  
 ばる、<sup>詞</sup>王子あらくどわらひ、わうくどはたれへのと、天子に父母な  
 しといへり天子と天の子とゝくわうゐにいついたるうへは我らが父

母は天地なり、かうくつくすおやもたず誰ゐあるしにぞこなひのお  
 ひぼれろれひつたてよとあくゝうしにせだゝらととりもつてちやう  
 だい深<sup>か</sup>くいりにける、せうしといふもとるゝなり、天わうわつとほこゑ  
 とあげ、木こり山がつしはやくあま鳥獸<sup>とやだもの</sup>にいたるまで、親子のなさは  
 するものといゝなる日ゝゝなるとき、いゝなるあつきの我がたいゝい  
 に屋せりつる、此のちいかなるうきめと見んいのちながさははぢの  
 たね、たへなばたへね玉のよよ、といひながらにくしといふも我子な  
 り、むくゝんばらのふびんやと、ぎよいのたもととりやうがんにとしあ  
 て、なげのせ玉ふぞ、だうりなり、げつけいうんゝく下司<sup>したつかま</sup>うしゝひとね  
 りゝゝいたる迄ろと、しぼらぬものはなし、女くはんめうふいたはりま  
 いらせやうく、かくに、じゆぎよならせたてまつる、あわり、さまこそあ  
 はれなれ



四季花うり

ころはやよひの十日あまり滋がの都とたび立てよみちにまよふらづ  
 らきの大君姫君たゞ二人あちやはだしのこつた山うちの中やせやど  
 もあくりよらうのしづとならざるやをそがのさとにつき玉ふ大君は  
 涙の下よりも口おしや我もしきに有し時はありそめのやうはいに  
 も七日のはらへ三夜の神事百くんぎしきとそなへしにきのふおも  
 にす此度はぬさととりあへずたむけ山神はしらすや我もくゑまもらせ  
 玉へと御袖とあき合させ玉ひければよはのあらしにさそはれてさね  
 が小つゝみるぐらうたはそろくせりとよくふえのあそりに聞へわた  
 るにぞひめもしんくさもにめいじあつとらうべとあたふくれば神  
 さびわたりみやぢたゞしきあそがのうたけ夜しづらにして四所  
 明神のはうせんはうくたるともしびもともにあはれむしんやの

月おぼろくとすぎのこのまともりくるはねぎのむそめうととめ子  
 ろ木くさのあへとあじらにいれはこぶあゆみのみやめぐり四きのく  
 さ木のわあへとしけれくとうへたものいまくるはるにさこすよ  
 のおもしろや有がたやとこそうへにけれい<sup>詞</sup>に是なる女しやうの程  
 しげりしもりはやしあゝさねて木とうへ玉ふとふしんにころいへさ  
 んひたうしやはじんぞけいうん二年あはちの國ひらとより此山に  
 やうがうなるされば神の傍ち<sup>詞</sup>ひに人のさんけいはうれしけれ共こ  
 のはの一はももすそのつきてやうせぬべきとかしみ玉ふも何ゆへぞ  
 人のねがひはしげき木のしよぐはんじやうじもとらへとくならげに  
 ありがたしじひまんぎやうのはるの花はみるさの山の白くも五ぢう  
 ゆいしきのもみぢはあそがのさと<sup>詞</sup>のあらにしき神のまにくとげ  
 頼む我も一もとうへときて草木國土成佛の神木とあがめんまづはる

はまぎの梅やなぎさくらもこきませて、しら玉つばき、よるつよと十づ  
 十やもゝのはなちよのしるしとうへとらん、なつにもあればうの花  
 にやまほとゝぎすや山人のはつねと、あこふうのきがき、ふぢのなごり  
 と其まゝにわふちたうざりむらさきのもかりと是もうもべし扱又あ  
 きははつしぐれふりみ、ふらすみくもるよの、あつらはまだきりげうす  
 き月さへ色にはぢのえで、ふねによるしあつまつ待あねてもみぢふみわ  
 けつゆにふすしのぶぐさ、我が懸草れんりのねだあなぞらへて、ちざり  
 のたねとやうへぬべき、ふゆのゆきまの姫小松まさき、まさきそきもみひ  
 びる、ときはのあへのうへとけば、しもにみぢりのこさうすき、花ひらけ  
 香のこりて、ぶつほうるふのあみの山ぼだいじものこりげとは、ふぢの  
 とりあふぢさきて松にもはなと、あそが山のせけきりげはりやうせ  
 んのじやうとのはるにととらめやなふ、しよぐんじやうじゆ、あいら

やうまんどくと、うやまつてぞうへにける、女あさねてす様、あたくの  
 有さまたゝならず、此比滋がの都よりさあめの王子の仰にて、ああき  
 うへ人のふうふつれたらんとあらめ取て参らせよと、あたきあふれい  
 へばもし其あたにていひ、とくいづかたへもあち玉へ、大君はつとあ  
 ぼせしがいや、我らはふうふならず、是のそれがしがいもうと成が  
 けいぼのさんにてうられ出、とはうにくれていぞ、やと有あたへとしへ  
 てたべとのとやかにてころ仰けれ、いたのしや弟兄弟あてまします、よ  
 そ迄もいはずわらわが方はあやとやさん、去あがら父母にうらふ  
 ためみづのらあさきへ参るなり、さるさはのいけのほとりにて父の名  
 はみきのおさ、わらは、うねめとや者、追付跡より出といへば、花てる  
 姫はたもととひのへ、心ざしうれしやあし何としるしあおやと  
 は尋ねすべき、さればこそとよ我ち、とみきのおさとやと此ならのさ

とは水のあぢはひあはくして酒をつくるにめう有故、父酒をつくつて  
 當國<sup>あき</sup>みまのいちにてあきあひふつきの家となりし故、三輪<sup>みづら</sup>のしるしの  
 神そぎとあり酒のしるしに我宿<sup>や</sup>もそぎ立るかぞとしるべあて、尋  
 ねきませと夕ぐれに跡としたひて行月日、あらしくらさせ、たまひける  
 ありのやどりぞあやなけれ、長<sup>なが</sup>ふうふの者共はあづらさの大君花てる  
 姫といつゆしらす、<sup>詞</sup>いたはしきたび人やけいばのさんと有あらは親さ  
 とへも歸られじ、兄弟ながらそれがしが養子<sup>やし</sup>にし、いもうとごはゑんに  
 つけ、あにごとむことし、うねめにめあはせやべし、<sup>詞</sup>我娘とはむるではな  
 いが、都人のつまといひてもあくあらじ、せんはいそげこよひふうふの  
 さあづきと、うねめにあはらけとらすればうねめはもとより大君に、ふ  
 るくぞ思ひよりいとの、親のゆるせしつまむそび心にあまるうれしさ  
 と、つゝみるねたるめつきにて、そでぐちひねりてゐたりける、花てる姫

はむつとしてこはいのにもくせん我あつとと外の女に祝言<sup>しゅげん</sup>させ、見て  
 はあられず我こゝつまよといふてのけふいやなのりて、<sup>詞</sup>さいせん兄  
 弟といひしとばちがふとあやしめられ、大君の一大老と心のとがせの  
 きみだく、色と見付て大君もうねめがさいたるあはちけ、うけもやらす  
 さしときてあたりとながめてはしまそ、<sup>長</sup>長は氣にあけ祝言の其あは  
 らけと取上<sup>詞</sup>、又うねめにつあはされよといへば、あつといひて取玉ふ、姫  
 君はち立袖ひき玉へば又あはらけと下にとき、それおさあづきはやふ  
 といへば又取上、又袖ひけ、下にとき、とつはといつ大君も、うろくとして  
 して取れとしあはらけみちんにくだけ、<sup>詞</sup>長はしうぎと取なとし、  
 めでたいく、あすおほくなるあらは、まごひこもうけんすいそ、う有明  
 月もあたふきぬ、花むこがねのあむまくらね所はれくのでい、うねめさ  
 るく、手とひけ、いもうとごはさし合、あゝにひとりふし玉へ、とくく

といひければ、めいわくそふに大君も、うねめに袂ひるさるゝはげにわ  
 りなくぞ見へにける花てる姫は、たゞひとり心みだるゝ、帯んまうの、犬  
 はねれりてはやふさの、たうにとられしはぬけ鳥、たつてもゐてもあら  
 ればころたゞ、あくより外のことぞあき、うしろめたくもねたましく、し  
 やうじのすきよりさしのぞけば、どもしびねふるねやのうち、我はだな  
 らで我つまの、外にはどぬ、下ひもと、あくやうねめが打とけて、ひよく  
 のむつごとの、はのきこゆ姫君ふためと見もやらず、はつと斗りにいきを  
 つめしばし、せきわけおはせしが、よの中おみづのら程おつとにゑん  
 なき者あらじ、うさめつらさめ、しのぎゝてたまゝ、そひたる大君と、め  
 のまへよその花となそ、たとひうねめとたれおもせよ、道にるむきしし  
 のびねならばりんきは女のならひなり、そもいけてはとくまじきお世  
 間とはゝゐる我々にて、ふうふといはぬうへゐらはうねめにといてと

がもあし、さだまるぬんぐは、うらむまい思ふまい、ふつゝとすてふ、い  
 や去ながらいつゝ、と月日とまちて、どいよぶねのよそにつく、な  
 ふよい殿もつもせわぞかし、こはそも何のむくひぞとたへ入なき入玉  
 ひしは思ひ、やられてあはれなり、いやゝ思へばこよひはゐくてもあ  
 りそべきが、明日ふたりのあはれと見ばよしあきじやきもおこるべし、今  
 はうらみてゐひもなき水の月とりさるさはの、いけに身とあげ此よの  
 はむらとやすめんと、思ひ切たるゐんばせあうぬうとたく、しんゐの  
 くはゑんむねにまとへる八重むぐらみだれさはがしさるさはのいけ  
 のみぎはにはしりつきたへなるのりの力にて此いけそなはちぐせい  
 ゐい、すくひ取玉へやとがつしやうすればなむ三寶人こそ來れ誰詞なる  
 ぞ、わらはゝうねめ湯ことはたそ、姫君様のなふうらめしや、どくおも  
 なのらせ玉はゝゐるちじよくは取るまじきに、うれ共存せすはとこ

迄參ましるばねものがたりに我々はあづらきの大君花てる姫と承は  
り、主有殿御としらすして女の道とそむきたるくやみといひはぢとい  
ひひきてあられぬわがこゝろ是にてうらみとはれ玉へとうちあけぬ  
いでやなきにわけ身となげんとせし所と姫君とめてげにもたゞし  
きけん女の心しらでうらみしはづるしやぐにんはいきてゑきもなし  
我こそと思ひるればいや我ころくとたがひお身とすて命とすてう  
きよとはやくさるさはのいけのねもくくに水どうくとしてなみ又  
ゆるくたりとあやめいもうのよの中是うねめのたはふれとねす  
なよ三佛せうのゑんゑんなるものと一ッはちすにいたらんど一二とあ  
らうひつゝいてとび入いけ水のそこのもくづとしづみしはためしす  
くなき次第なり長ふうふは聞つけて大君も共はしりつきあまたそ  
いれんめし入れてあなたこなたとみなそこよりもよほせば二人の

しがい人々悦び引あげたれ共はやいきたへて身もひえたり父母大君  
そがりつきわきも子がねくたれがみとさるさはのいけの玉もと見る  
ぞのなしきとなけとさけべとひぞなき涙はいけとにこしけり時に  
りよ人とおぼしくてすげがさきたるらうおう三人じやうゑのはかま  
ふみしたきしばらくく此女はうしよくにまよひしゝたれ共あす  
かのやしろお樹とらへしけちゑんにひわれよみがへることうたがひ  
なし、みたりのおきながまひのそで今日のほきたうなりありはらやた  
あまがはらのそのむろしあまついはとのあみうたど、うたひてひざや  
いのらん、どうくたらりたらりら、ちりやたらりはさていかに是しん  
ごんのひみつあて、たへずたうたりたきのつゞみはふくじゆゑんまん  
たいへいらくとしらふなり又ばんだいのいけのあめいおうにいたゞ  
く三きよくのなきさのいささくくとして神のうぢ子のゑんめい

ちやうじゆまんざいらくく、むじやうしんれいしんたうかじとはら  
 ひ玉へば二人はたちまちいき出て、ちすしく見へおけり、有がたや  
 ふしぎやな、さもわれは身たれやらん、我はせいしういす、がはきよき  
 みなもとくみてしれ、扱又是なるらう人は、我はつのかにすみのゑの、わ  
 り松しげるさしりげに、としへて、そめるれきなくさ、はずゑの色とつみ  
 てしれ、今一人の老翁は、當國當所此山に、むらさきおほふちの、明  
 くれどはれしうれしさよ、扱はるすが大みやう神、ひりあまてるおほ  
 んがみすみよしの、ほがみと、今ころ見つれみ、さやま、みつのみ、さよ  
 りさしきてあめが下ころたの、しかりけれ、神はまことの、うべにあそ  
 び、ほとけはじひの心におうそぶつじん、そいはの、しるしは、これ、この、い  
 けのしらなみたきのつ、みはほる、くく、と、るく、とくはん  
 ぎいやくのまゆとひらきてあ、と行すゑと、まもるべしとの、ゆゑに八

こゑのどりのこゑく、おみるせ、山のせさ、さつとしてわけ行そらと  
 よく見れば、有しはみるさ山はの、ととして神はあがらせ玉ひけり、大  
 君しんく、五たいにめいじ、残りしみの、ゆゑさよ、ちせのらい  
 はいまんせの、いらひ、おみといさめてくはんぎよあるならの都のたき  
 の、のう、此時よりぞはじまりける、みたりのたきなの舞、とひやうし、  
 しき三ばんとは此おんゑんさてこそ、こくせおんせん、今日のほきた  
 うに、五こく、よに、よのあきつしまるぐら、みそじひともじのわの  
 みちいもせのみち、わが、おみのみち、すゑひろくや、はらぐ、國こそゆたか  
 なれ

第四

三志やの神の、ゆじげんにて大君と聞しより、長ふうふはか、さるさ、あら  
 ども、のしとねと、参らせ神の、みるさを、だん上にいはひ、神酒へいはく、ゆ

しめなは神と君ととやまひける、大君仰有けるは、兄惡王子あそは  
 れるくさそらふどはいひあがら、しんりよそてさせ玉、はすあたくしが  
 なさけのうへわうあひのぞみ、あらねども、母みあどもおぼつあ  
 し、又くにたみのあゝる世にあふとのふびんさよ、一ッは此たびのほれ  
 い三じやさんけいののぞみあり、いゝはせんとの玉へば、長承り<sup>詞</sup>ほぢ  
 やうほもつほもに、しゝらばあそがはほそちのし伊せは又ほそと  
 し、まづそみよしへと存じ、ほさりながら、王子よりせんぎつよく人のと  
 がめもいふのしければ、さいはい此みあさののきにくれあゝるのもう  
 とはりてほがんとあくし、すみよしとそりにしたてなべどがむる人も  
 へまじ、うねめもおともいたさせん、伊よりいとふだそき、しんたうし  
 ぬぎやうのたびなれば、下人もつれずたゞ三人、あないはあねてみちの  
 きあ、あき置くふでやそみよしの神まう、でこそしゆせうなれ

花てる姫道行

うゝあうふりの、すきひたひ、あすがのさどにぬぎときて、みるさが下の  
 はらげがみ、ゆひかはしたるひとこと、のちぎりはくちを戀にたつ、うき  
 なるきけせず、みよしの神のみくじの、一二三四しやのれまへの姫小松  
 ちよのねの日にひきそめて、すみのゑの、さしあよるなみ、よるさへや  
 ひるは人めに、こがくれし、あしはぎのもりくらきより、今とはじめのた  
 びころもたちのくこまの、あたたづな、はなれぬくみぞあはれなり、よし  
 やこきやうと、はなる共、あへんなんいさ、あへるには、しあじとつくる一  
 こゑと、いゝにいつまで聞くあそや、み、なし山のほと、ぎそなみだの  
 こほり、どちときて、もの思ふそでと、みな月の、どけぬひむるとくらべ  
 見ん、ひむろのやしろふしれたがみ、とゝるさのはしとゝるあそ、なれも何  
 もへよの中、としのびぐるまのうし、とらうたつたのやまの、はつにしき

ふりわけ見れば、さのはのべにあてる日もくもそめてひむくほそて  
 ふ、あまのらく山、あれぞらし、手にすへて見んたるとり山さて又みなみ  
 は、みわのやましづの、とだまき、くりあへし、くへれや、あへせあはれ  
 ろし、むろしにあへるよはならば、あやのつり手に思ひとしめて、まぐら  
 ひよくにならべてふたつ、あふせうれしくおびとさの、あはとわたりて、  
 ゆくみづの、すむやにさるやしく、にうつりあはるもならひにて、よ  
 はみな戀のひとながれ、くめの山べのせん人だにも袖のぬれぎぬ、あら  
 ひし女、ゆきのはだへの、あしろたへと、そろのひま、くはの、見ろめつ  
 くもの、あよひぢつう力うせて、こがれうきふし竹のつねさ、すみのゑ  
 の、はまの松がねあらはれし、人めづ、みのゑがいのさど、うきなながそ  
 なるはち、あ命のとふねしばしとてつなぎと、めん、いこま山、ふもと  
 にそぐる夕だちのくものたへまふとふ鳥は、ひらく、ひらのもはやす

ぎぬ、むろふはなにはあしのはの、ながれとまりしあはぢしま、はてのさ  
 うあいまん、くとしてあときがはらのなみまより、あらはれ出し神松  
 の、姫松のさしほどもなく、住吉に、つき玉ふ四亥やのみやゐの、あたと  
 ぎの、あたじけなしとこのはも、心とたねのたひけぐさうきこと、しばし  
 わすれ草いざわそれがひひろはんとはまべに、出させ玉ひけりおきと  
 はる、あに見玉へばるにんぶねとおぼしくて、ふな屋かたに高もがり兵  
 具さびしき大せん、こちふくあせにはとあけて西とさしてはしらそ  
 る、大君うら人とまねき、あやしやいあ成ふね成るらんと、の玉へばうら  
 人聞て、あてあくれもないと旅人はあ存じひはぬ、あさあめ、の王子悪き  
 やくにほこり、あ母天わうさまと日向の島へながし奉るふねなりと、い  
 ふより人々はつとれさるき、大君はこゑと上扱あさましやあふ其ふね  
 しばらくもさしてたべ、なふ母上様大君にてひは、やれふな子共其ふね



もせせこぎもせせといふ打なみに傍あしとひたしよべせまねけせ  
 せんふうおほは八ぶんにもたせたりみつばのそやのとふごとくあ  
 れおはぢのしまがくれをまのせきのとせきとめぬ涙にぞむせばる  
 へ扱せひもあき次第なりおなわ五郎今國は天わうとんと聞よりも  
 ひてうのごとくおけ来り人々ときつと見ては是は姫君様大君様の  
 なわが参りていといへば人々おろれとびしさりおもてはおなわに  
 まがひなし汝は王子にくびとうたれこもえにのりしが二たび来  
 るの何ごとぞ、く、渉尤く、松岡と中繪師にあらだとりくびとい  
 だよみがへりいとの次第一々にあたりくびのなわとうたいは松  
 岡一身二人の一字ととり名ともおなとあられためいとやせば人々  
 やうく聞とけ、扱々きたいふしぎやと渉悦びはるぎりなしとさう  
 ながら母みおとさうばひ取り奉れとの玉へば、詞あとおおきとるる

に見てはや五六里ものびたるうへ、追手つよくいへばふねにてとつ付  
 くところたるべし、いゝせんとおんせしがくつきやうのところい  
 へられがしが此うで元來あるきのめい人ふてめうとゑたるうでばね  
 なりあのふねもせして見せやさんとくはい中すゞりふでとそめしや  
 とうふふるきゑまのしらすぎつばにふでのせいとくはへまゑこあ  
 たましい入れければふしぎや此さきいけるがごとく繪まのいたとは  
 なれ出三羽のしらすぎ人々の三がいのさひつくりへおきのそらへ  
 とおけりしが程あくふねおとつ付きへささへまはつてはうせと立く  
 はへし笠にてあどぎたてあどぎたてたる神風のさらく、さうくく  
 となみもうしほもさるまきてみぎはのたへふきもせと、はいしよの  
 預りひうがのむらじふあばりお立あがりやれはとれるせふねへそ  
 なすい主おんせりるとたてなとしこげども、とせ共たのなみにはばし

らふたつにふきかつてはや二三里をふきもせすのなとるゑたりうれ  
 しやとあまののりそて手ぐりぐりくくふねに一人取のり大あせ  
 むがしこくほせにはや大せんにごぎよせたりやがてひらりとりのう  
 つれば大將むらじとはじめとしてさう兵ふあつたはらうせきぞを  
 いりけるのなとのあたりどねめまはし天めいしらすのぐにんめら  
 天わらの傍むひに來りたりじくねたらばあだつはしうみへとつは  
 めくじらのゑじきとなそべきぞとふなやのたのたのもがりはらりく  
 どとしやぶりみりぞといだき率り小せんにうつし參らそるむらじ大  
 きにさしよくとそんじ諸國のつゝさはき中にさめめの王子傍が  
 力にて此むらじに仰付られしにうばひとられていきがひなしめい  
 がへりのあらじやうらい何はせのとの有る天わらもる共うらこるせ  
 どはがみとあしていりける金岡うらくとわらひさしほらしさう

でだてしゆらだらふてならひたるひやう法のひじもつと見よと又大  
 せんにとびうつりういふりあけてなきたてく打まはればふねも人  
 もたまらばこそさしもの大せんみちんに成むらじはあがるのち  
 取付うきつしづみつたよふ所とい取のべつさながせばそこのも  
 くつとしづみけるこちよくこそ見へにけれくがには大君花てる姫  
 きてがらく其ふねのやくとせりあがつてよるこび玉へば母み  
 りせもゑいゝんのあまりよせよとせき玉ふのなとのへいたにつ  
 立てられ我國は神の傍そゑふきあはせすのみことのきさきたまよ  
 り姫は龍神の傍むすめたりうみとゆづりのひるこの神はかひせぬの  
 一天のみりとのほふねとつぎやされよとたうららによばりける  
 天地まこととらんじてやあまたのうろくづうのみ出うらるとならべ  
 ひれとふりほふねとしめし奉るゑとあふぎとさつとひらき

おもしるし〜まつめでたいとさきだて〜ときとるふなの湯よるこ  
 び、是まいねんのうれいにて、君がぬせいは手あがだこ、まろく見ゆるは  
 ぼんさま〜ちとたしゑまだこ入道せの、うんとひらくやさくらだい  
 はなもはも、こちゑろ、とくとふぐとのせくもなく、よはひとのへてゑひ  
 のこし、みつわぐむ造よろづよの、おめのかうなる松竹の、おはらぬ代  
 にすみよしのまづ〜神といさめん、と、打つれ立て悦びの、うぐらと、さ  
 げ玉ひける

第五

まうのさうていたうの三尺みあこへいともつてたつとしとそ、されば  
 天わう三じもの、おんきのうつしと以てさ、おめの王子とあさむきまこ  
 どのた、おらひは身とはなたすせん中途もたせ玉ひし、おば、ぎよくたい  
 につ、がなく大君はげさん有けるも、是神寶の、湯めぐみ、とばすせ共草

木造さ、おめの王子になびく世の、ふしもくげもひとりとして君にした  
 がふ者はなく、ゆんでもめてもほ、おたき、一まつやまとへくはんかうあ  
 るべうい、と、おなと、おしあんにてわさと其日とくらしつ、大君姫君  
 天わうの、手と引玉ひければ、うねめはみさきの夕つゆと、うちはらひ  
 くよはにぞ君が玉ぼこの、足よはげ成、は有さまやう〜たせらせ玉  
 ふはせに、やまとおはちの、さうひ成るあなむし、山につき玉ふ、比しもち  
 うしう、十四日、まつよひの月ふけて同じくも、おのあまつあり、は涙とそ  
 ふるたよりなり、<sup>詞</sup>おなと、おや上げゝるは、此よりおさきへ、つてなん  
 所おほくいへば、しばらく此所にて、湯さうそく然るべし、やあさいはい  
 のところいへと、山田の、おせの、いねはしたる松、おげにしのばせ奉り、又  
 ほしとねのためなればと、あたりのいねを、おきよせて、湯ひさおし、おせ  
 参られば、大君立の、さしきたるいねを、おしのけさせ玉ひ、まことおと

が心ざしはあつけられ共此いねと我ひざにたしめんたれありは  
 るいたがやしなつはうへあきはみのりてふゆとさむ民百姓のくるし  
 みは千束万束も一はのいねもあはらぬぞやされバ十せんのくらむば  
 ふむ共たみのやしなひあらずんばいので天下とおさむべき天子を  
 くるのどしいねのはつはと天照太神へ奉り大宏やうるとおこなふも  
 たみよあはれむしるし神又たみよあはれみてぐもつはみさねとつた  
 へたりさぬ天のしやもんぶつは五こくとすてたるさいとらひ五ぎ  
 やくにまさるとときしとらや此のげに立よつてよるのつゆとふせと  
 さへくはうだぬの五こくとんしたにしろば天神地祇我とがめ玉  
 ふへき我此たびさまとくうさめにはあひたれ共たみ一日のくるしみ  
 にはいのでらおよぶとあらんと涙と涙衣にけながら一しゆのき  
 よせいにく斗秋の田のりはのいほのとまとあらみ我ころも手は

つゆにぬれつゝとゑいじさせ玉ひければ天わうとはじめ奉るおのく  
 あつと斗りあてゐる袖にあまりけり母天わうゑいゐん有げに  
 有がたきこのはたみとめぐむはせい主のどくじんは王たうのひじめ  
 いつの時とらとせんた々今くらむとゆづるべしとつゆと結んでほて  
 うづ天地四方とほはいありありはのいほのりほてん木の丸殿にな  
 ぞらへそなはち天智天わうとどうし玉ひつゝほそくる有こそめでた  
 けれこゝに花てる姫の母父たちはなの右大臣とみふさ公は滋かの  
 都とのがれ出ていはつせんゑに身とやつし伊勢兩宮へ参られしが太  
 神宮のほつげありとゑき馬打のりいがこへにむちとはやめうたせ  
 しが此馬にはるにけしとみてみゝと立毛とふせてうて共ひけ共とゝ  
 まねば馬のたいらつてちくしやうめこりやあねだばねがおれたの  
 はつこしゆもないとどうちにける詞とみふさほらんじさなせそく

もし此へんにやしろばしあつて我のりうちと神のどがめなんめりとの玉へば馬のたのさねて、此道はわうくはんにてまひ日たび人とのせやすがるやうのとはひはすさりながら、馬上（まじやう）いぶるしどくく、とやがて馬よりおろし参らせ、もしおほかみや有明の月毛の此こまをひつたて見れば、ふしぎやなものとこのくにあゆみ出胡馬（こま）北風（きたかぜ）あいはへ行とみふさいよくふしんはれず、我右大臣のくらゐるればのりうちとどがめんもの神の外にはわうゐなり、うたがひもなく此へんお天わうのましまそと、このしことさまよひ玉ふと松のげより何者と、いふことをにたよつて見れば我君なり、天わう様の大君様とみふさ成は父上ると、覺ぬすは衣にすがり付是のく、と涙、ほげんさんころふしぎなれ、扱（あ）らすく、の物物がたりゐなと、あ上けるは、しめくんとみふさ参りあひ玉ふうへはぎよくたいに氣遣（きぢやう）あし、いつ迄のくてははんろれがし

一人だいらあけこみ、さあめの王子とさしちがへさつろく、伊代に立て中さん、ばやあいとまとすければ、ともあくもばんたんなちあまゐる間、其馬にのつて参るべしとのりんげんにて、すなはち馬のたの馬りやうのくんにふせらるゝ、金剛ちよくと承りてつとちともつてゐためたる王子なり共、忠孝のちけんよふらばやはらうたでいべき、このれ馬のた下らうあり共ふてんのしたにそんでうとんといたゞき、きたいのくはんにはいにんそるみやうがと存せば、命とかしむとなれ、かくびやうばらはたらくないそげく、といひければ馬子はゐたぬぎひねとたゞき、我らは繪師の氏久が世倅、今天もくの彌源次とて、小すまふの一ばんもひねる者、きづひなさるな五人や十人はあさがけのだちんぞと、夕つげ鳥に、夜はあけてさうはてるく、あふさののせきうちこへて、さゝるみや滋がのだいらにさあめの王子、天もゆるさぬてい

むにつき、びぢよいんらくとどして酒をんに月日をおくりけり、  
 る所にあなごは彌源次に弓と矢もたせ、あんでんのひろにはへ、一も  
 んじにぞのり入ける、百くはんおせろき、ゆゆうのありあらうせきも  
 の、あまさじとぞ取まきける王子きつと見くしばらく、きやつはあ  
 なは五郎命とついであごとなのるだんさきだつてしりぬ、すいさ  
 んはにくけれ共あふぞ、あごはひむし、なんせいふものは、貴人の頭にと  
 まれ共むしと思へばはら立す、むしせうせんのおあごゆるしてあま  
 ふなく、となぶつて心とためしける、あなごちつ共あくせず、あはひ  
 の中にもあごはひは、ちいさけれ共せくあつてふくちうに入て五尺の  
 人の命ととる、一寸のむしに五ぶのたましひ、さあめの王子のくびと  
 るあなごのとすあごはひ、ちつとお見まひやさんと馬よりひらりと  
 とんであり、ひざたてなごせば彌源次も大あごにとびあがり、あごはひ

はごはあられ共馬につく馬ばひ、手なみは見せつけおいたればくごふ  
 ばいばぬとすしける、王子のいうつてがんしよくへんじ次將のはごご  
 おつ取て、いさかはりしにあらばくたいのくはんたいもの、ぞみやあ  
 におへれさなくばはごにつきつらぬき、あうべよりつまさき造つに  
 くごごにはたき、はひになしてながくしやばのゑんとさらんと、八方に  
 はごよりまはそ其いさ、はひせうき大臣さのれの、みことも、あくやと  
 すさまじし、あなごあらく、と笑ひ、王子殿しよしんなく、ゆすり  
 とくよ男であし、去年は身にうたる、時一寸にても身の中あつ、さし  
 所にたましひとまり本望とげんとすしたる、一ごんはたがへず、其時王  
 子のことばに、うんつさてくび取者はあなは五郎と有けるが、今ぞうん  
 のつき所とともとらでいごぬくび、あんじやうあわたされよ、されく  
 げたち王子あつくる天わうあしたかふる、いごに、といひければけ

いしやううんらく一どう詞になふもつたいなや今迄こそせひなけれ、天  
 いうの涕みわたとこゑ詞にやさるゝ王子はことらりとそてくれ  
 なるの涙とながしはがみとなして詞、むねんなりくちおし、捕とらも一を  
 は、くちいはほも、やくるじせつ有しんめい神明にはなたれ天うんにつきぬれば、  
 ちう力とてもゑきあらずさりながら、我一しやう人間のあらもるはざ、  
 人にとりしとなけれどくびになつてはたらくと、是斗はなんぢにま  
 けたるざんねん有、いきてはたらくはめづらしめらず、只今うたれて我  
 くびの、もしあへなくなればわらひやさ、又一とんたがへずはたらうば、  
 せめて末代あたりつたへてけうやうせよ詞、しんせいぎうばふういま  
 しんぬ、そいりのあはしんせいともにてんにきすと、うしやうにゑい  
 ぎんしきよつてうて是までとくびさしのべてぞ見へにける、金剛さい  
 てしんべういさりあ詞から、悪人あれ共王子なりすぐらうつはあそれ有、

ぬき合せてせうふあれ、天のせめとうけたれば天のつみとぞる一め  
 い、なんぢにあたふるくびならず、はやとくくといはせもはてす承は  
 るとふり上て、みづもたまらず打れとせば、おろろしや王子のくびうめ  
 きわたつてこくうにあがり百くはんとおつ立く、あなとあよめがけ  
 とひまはすは、そさまじかりける次第なり、あなをのあみとやうちつが  
 ひさんく、あいうくれば、いる矢とちうにてひつくはへく、四方にむ  
 ちつてふきあけしはた、ふる雨のごとくあり時にうん中いなびあり、  
 ひがしに日りんおしに三日月弓はりの、あげにしらんのあふらやとさ  
 りく、と引たはむと見へけるが、きれてはなる、あふらやの王子のあ  
 うべよこさまになりわたつてぞ立たりける、あつる所と取てとさへう  
 だく、にさしとおせば、日りんわくはう、あくやくたり、てうてきめつば  
 うこつあ太平のちちうしん、天智天皇は母みるをやがてせんあうまし

くして天下とおさめ玉ひける扱こそわらの一とくに國もとさまる秋  
の田のありはの五こくふによろふて民あんせんのあさつ國猶行末こ  
るめでたけれ

天智天皇終

明治二十二年九月廿九日印刷  
同 年十月一日出版

(定銀金七錢)

翻刻兼發行者

早矢仕民治

神田區宮本町五番地

印刷者

松本秋齋

本郷區湯島一丁目十三番地

賣捌書肆

神田區宮本町五番地	叢書閣
同 表神保町	中西屋
同 同	斯文館
日本橋區通一丁目	大倉書店
同 三丁目	丸善書店
銀座四丁目	博聞社



2K-31

○近松著作全書

第一冊

○近松門左衛門傳 ○百日會我  
○おさん 戀八卦柱曆 ○けいせい 反魂香  
茂兵衛

第二冊

○本朝三國志 ○徳兵衛 重井筒  
○姫山姥

甲

依田百川先生評 定價三十五錢  
一谷嫩軍記

乙

小永井小舟先生評 定價三十五錢  
忠臣講釋

○新評戯曲十種

高津柏樹生先標註

○標註 徒然草讀本

全二冊 正價三十二錢

該書ハ文章優美ニノ寓言滑稽ヲ交ヘ看者鏡花水月ノ想ヒアリ唯佛意ニ癖シ又ハ男女ノ交情ヲ述ヘタルハ往々平穩ナラザル處アリ斯文ニシテ斯瑕有ルハ惜ミテモ尙餘アリト云フ可シ高津先生茲ニ感アリテ佛癖又ハ猥褻ニ涉レル者十餘ヶ所ヲ削リ意味ノ解シ難キ者ハ解釋ヲ加ヘ又文法ノ誤リヲ正シ之ヲ頭書ニ掲ケ猶本文假名遣ヒ等ヲモ訂校セラレタル良書ナリ

7

4

天智天皇

近松門左衛門

国立国会図書館

088319-000-1

特17-654

天智天皇

近松 門左衛門/著

M22

DBI-0157



特

6